ブラックボディに映えるゴールドメッシュ R35GT-R用サイズを完全攻略!

FAIRLADY Z × WORK VS XX [Z34]

第1回 ワーク フォトコンテスト ～銀賞～

2020年末から2021年始にかけて募集・開催された『ワーク フォトコンテスト』。ワークホイールを装着した車両の写真を応募し、構図やアングルはもちろん、被写体のカッコよさも含めた写真作品のコンテストだ。いくつかの受賞作品の中から、撮り下ろし取材を敢行した『銀賞』獲得マシンのZ34を紹介しよう!!

「ワークさんからコンテスト銀賞の連絡を頂いた時は、ホントに俺でイイんですか?って、思わず聞き返しちゃいました」と、感想を正直に語ってくれた谷岡さん。愛車のZ34は5年前に購入し、その時点ではコンケイブデザインのアメ鍛ホイールを履いていたが、このクルマのマッシヴなフォルムにはディープリムの方が絶対にマッチするハズ…と、装着すべき逸品を物色していた中で、たどり着いた答えがワークの3ピースメッシュ『VS XX(ブイエス・ダブルエックス)』だった。

ここで、谷岡さんはZ34サイズを履くのではなく、フロント10・5J、リヤ12JというR35GT-R用サイズをセレクト。そのため、フロントのアッパーアームには、Z34より2㎝ほど短いV36スカイラインセダン用に変更。リヤについてはノーマルの調整幅をフルに活かすことで、純正フェンダーには一切手を加えることなくリム外周のラインがクッキリ際立ったツラツラのマッチングを実現している。

なお、足回りはブリッツの車高調『ダンパーZZ・R』をベースに、フロントは326パワーのチャラバネ、リヤにはSNS仲間を通じて手に入れた、エンドレスの車高調用スプリングを移植。キャンバー角の深追いを敢えて避けた、オトナのロワードスタイルは非常に魅力的だ。

このルックスに相応しく、吸排気系の変更に加え、GTワークスでECUの現車セッティングを行なうなど、パフォーマンス面もブラッシュアップ。ノーマルでは300psプラスαとされているZ34だが、最高出力340psを発生させている。ノーズ周りには飛び石による塗装の欠けがアチコチに見受けられ、オーナー自身も高速走行を存分に楽しんでいる様子が伺えた。

次なるステップとしてはVSシリーズの最新モデル、VS XXの存在もかなり気になっているようだが、現状のトータルバランスが完璧なだけに、ここは考えドコロだという谷岡さん。果たして、その結論はいかに?

ボードに並んでいるのは全国のZオーナーズクラブのステッカー。地区ごとに定期的にオフ会が行われているようで、今年10月には山口県・秋吉台で西日本エリアの大規模なミーティングを開催予定とのこと。

「Z34には絶対にディープリムホイールが似合う」という信念のもとにセレクトしたVS XX。こだわりのリムには谷岡さんの所属するカークラブ『Z-follows』のステッカーが輝いている。

「Z34はこれまでの車歴の中で、最も所有期間が長いクルマ。今でも全然、飽きが来ないですね。Zに乗り始めたことで、SNSを通じてたくさんの仲間が増えました」と、谷岡さん。

谷岡さんが撮影・応募した銀賞受賞写真。ロケ地は山口県下関市のドライブスポットとして人気の角島(つのしま)。とても爽やかな写真だが、実際にこのポジションで撮影するのはなかなか困難(〝引き〟がない)。Zらしさを捉えたアングル、青く澄んだ海など、まさに会心のショットと言える。

純正フェンダーとの紙一重のクリアランスを保ちつつ、インセット+6の12・1JリムというR35GT-R用サイズをアウトリップで履きこなす。タイヤはニットーNT555G2。トレッド幅は純正同様だが、前後ともロープロファイル指向としている。

発売開始から20年以上が経過している「VS XX」だが、ディープリムの重厚感と、オーバーディスクにより強調されたメッシュデザインのコンビネーションは、未だに一級のインパクトを放つ。シンプル&シャープなオーナメントロゴもオーナーのお気に入りの部分。

Z34の美しいプロポーションを存分に引き出したエクステリア。リヤゲートのウイングは専用のメーカー品かと思いきや、メルカリで見つけたノンブランドの汎用品で、ステー部分は知り合いのショップ、ボディショップタケウチで加工。マフラーはロッソモデロ、HKSのメタルキャタライザーも装着。

取材協力:ワーク ☎06-6746-2859 https://www.work-wheels.co.jp

PHOTO:金秀研吾 REPORT:高橋陽介